

2019年10月6日(日)／説教者：神谷武宏

説教：「平和への道は」

聖書：エステル記4:1～17

一人の政治家ハマンは、王に継ぐ位の座を手に入れた。王以外の間人は、ハマンに対しひざまずいて敬礼をすることが定まっていた。ところが、ハマンが王宮に入り皆が敬礼する中、役人の中の一人ユダヤ人のモルデカイだけはハマンの前に出てもひざまずかず、敬礼もしなかった。何故モルデカイは敬礼しなかったのか？ この「敬礼」は、「拝む・礼拝する」との意味にもなる。モルデカイが敬礼しなかったのは、彼に敬意を示さなかったというような軽い事柄ではない。「神として拝め」という求めに対して“否”の態度をとったと考えられる。その態度にハマンは腹を立てた。どう懲らしめようかと怒りを増幅させていく(3:6)。一人に対する怒りから、多くを巻き込んだ憎しみへと拡大していく。人間の怒り、憎しみは、底知れぬ怖さと同時に、愚かさを見る。

エステルには両親がいなかったため、モルデカイが我が子として育てた。そのような関係の中で、王妃になったエステルにモルデカイは問う。ユダヤ人迫害の企てが始まっている。王妃として王の哀れみを請い、王の前に願い出てこの企てを阻止してもらいたい。しかし、王妃といえども王の招きを受けずに王のもとに行く者は、必ず殺されることになっており、事の困難さをモルデカイに伝えるのであった。それでもモルデカイは迫る。《自分は王宮にいて無事だと考えてはいけない。》その迫りにエステルは眠りかけていた魂を目覚めさせられて《私は王のもとに参ります。このために死ななければならないのでしたら、死ぬ覚悟でおります》と。息の詰まるような問答、掛け合いがなされていく。

このエステル記から何を学ぶものか？ 聖書は、語る書物、聞いていく書物である。今、ここでどう聞いていくかが、聖書が私たちに与えられている大きな価値がある。モルデカイの《自分は王宮にいて無事だと考えてはいけない》という言葉に、私たちも心動かされなかったか。私たちのこの置かれた沖縄において、この御言葉を一緒に聞いていきたい。

ドイツの牧師ボンヘッファーはこう語る。「平和への道は、安全という道の上には存在しない。何故なら、平和は危険を冒して実現されねばならないという、一つの大きな冒険だからである。そして、平和は決して、また永久に自分の安全を保障するものではない。平和と安全とは正反対である。」

「平和はつくり出すもの」であるというイエスの言葉と重なる。「平和への道は」どのようにしてつられて行くのか。私たちは今週(木)、75年目の「十・十空襲」を迎える。沖縄戦の始まりとも言われるが、この時期、改めて「平和への道は」ということを考え深めて行きたい。(神谷)